

★今週の聖句

「それから、“霊”はイエスを荒れ野に送り出した」

マタイによる福音書 1:12

★ねらい

イエスさま自身が私たちの救いのために悪魔の誘惑の苦しみにあわれたことと、十字架の死に打ち勝たれたこととを結びつける。

★説教作成のヒント

- ①今週から“四旬節”に入りますが、この期間、イエスさまの十字架への意味と道程を伝える。
- ②悪魔（サタン）の誘惑とはなにか？
- ③イエスさまご自身が悪魔の誘惑との戦いに打ち勝たれた方であることを知る。
- ④イエスさまの周りには、いつも“霊”及び“天使”の働きがあること。

★豆知識

「荒れ野」→ パレスチナ地方のほとんどは一部を除いて人の住めない土地が多く、そこは多くの危険がはらんでいる。

「サタン」→ 別名、悪魔と言ひ人間をあらゆる悪に誘い込む働きをし、人の心を神さまから引き離そうとする者を言う。

「野獣」→ 荒れ野に住む狼や獅子などで人間のみならず、家畜などを襲う動物。

★説教

今週から一ヶ月にわたって、イエスさまがいよいよ十字架に架かるためにエルサレムに向かわれる旅の終わりに近づいてきました。イエスさまの生涯は実に恐ろしい十字架にかかるための一生でした。十字架というのは罪を犯した者の中で、最も残酷で恐ろしく厳しい刑罰でした。なぜ、罪を犯してもいないイエスさまが十字架にかからなければならなかったのでしょうか？ それを考える一ヶ月間を「四旬節」と言い、また「主イエスさまの受難節」とも言います。

その前に、悪いことをしてはいけないことはみなさんも十分知っていますよね。しかし、私たち人間はそんなつもりがなくても、してはいけないことをやってしまうときがよくあります。

そのつもりが無くても悪いことをしてしまうケースに、悪魔の誘惑というものがあります。悪魔というとか何か恐ろしいかっこをして「怖い」という感じがしますね。しかし、そんな怖いカッコしたものだけが悪魔の誘惑とは限りません。また、悪魔は外からやってくるだけでなく、実は私たちの心の中に住み付いている場合があります。たとえば、甘いものばかり食べていると虫歯になって痛い目にあうことを知っていますが、目の前においしそうなケーキが並んでいると、分かっているにもかかわらず、ついつい沢山食べてしまうことがあります。

そして後でしっかり歯を磨けばいいものを、ついつい磨かないでいることがあり、後で痛い目に合

うことがます。この分っていないながら、ついつい食べてしまうようなことを「誘惑」と言います。ケーキの場合は、後でしっかり歯を磨けば問題が無いのですが、甘いものばかり食べていると、「肥満体」という体になり、病気勝ちになります。そして後になって「ああ、止めておいたほうがよかったのに・・・」と経験をよくしませんか。何事にも、我慢強く心がしっかりしていればこのような誘惑に負けませんが、しかし、私たちの心は弱いものです。その心の弱さに打ち勝つためにはどうしたらよいのでしょうか？

それは普段からしっかりと、私たちの心の目を開いていなければなりません。今、自分は何をなすべきかをよく知るべきです。また行動する前にその結果がどのようなになるのかよく考えるべきです。その次に、心の中に隙間や油断が無いかどうかを見極めなければなりません。そして、決断したら迷わずに行動に移し、最後までやり通すことです。ところが、時々、やってはならないことをしてしまうことがあります。たとえばお友達に良かれと思ってやったことが、かえっておせっかいになって喧嘩になることがあったりします。このようにそのつもりが無くても、自分の意思とは全く違ったことをしたりする経験がありませんか。

これは、自分がこれからやろうとすることをじっくり吟味する（あるいは、良い事か、悪いことかを考える）ことによって避けられることです。

すなわち、いつも注意をして目を開けてそれが「悪魔の誘惑」であるかどうかを考えて行動すれば問題とはなりません。もし、もし自信がなければ「我慢すること」も大切になります。また、出来ることと出来ないことをはっきり見極める普段の心がけをもっていると、悪魔の誘惑が入り込む余地（隙間）がありません。それでも人の心は弱く、悪魔の誘惑に負けて悪いことをなしてしまいます。悪いことを罪と言います。罪を犯した者は罰を受けねばなりません。嫌ですね！しかし、この私たちが受けねばならない罰を実は神さま自らが私たちの身変わりになって受けてくださいます。それがイエスさまの十字架の意味なのです。ここに神さまの愛があります。隣人のために命を奉げる犠牲が十字架なのです。

イエスさまは神さまですが人間と同じように生まれられたので、まず、このようにいろいろな悪魔の誘惑の試みに遭われました。そして全ての悪魔の誘惑に勝たれました。それにも関わらず、父なる神さまが命じられた神さまの人を救うという御旨にしたがって十字架に向かわれることを忘れてはなりません。

この世で悪魔の誘惑にも勝たれ、更に十字架の死にも打ち勝たれた私たちの救い主イエスさまです。私たちの罪を神さまが受けてくださる。なんと素晴らしい神さまではありませんか。

★分級への展開

さんびしよう

*讃美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

44番

改訂版80番

やってみよ

□今週から四旬節がはじまりました。

およそ一ヶ月かけて、イエス様の十字架を覚えていきます。

そこで、今週からイースターまでの間、イエス様が背負われた十字架を覚えて過ごしましょう。

□今週は、これから用いるための十字架をつくります。

外は寒いですが、あたたかい格好をして十字架の材料を探しにいきましょう。

・外に出て、木の枝を拾ってくる。

雨などの場合は事前に用意しておいても良い。

・十字架の大きさは自由だが、20cm～50cm ぐらいがちょうど良いと思われる。

そして、見つけたら十字架をつくりましょう。

・拾ってきた木を切って使っても良い。

・十字は上下10、左右6として、上から3のところを交差させるとバランスがよい。

・交差するところを削るなどすると、なおよい。

・交差するところをあさひもでしっかりとしぼる。

はなそう

□荒野野というのは、どういう場所でしょうか？資料を見て調べたり、想像したりしてみましょう。

どんな土？どんな空気？どんな植物があるの？どんな生き物がいるの？水はあるの？

□イエスさまは、どんな気持ちで、40日間そこにいたのでしょうか？想像してみましょう。

★今週の聖句

「人の子は・・自分の命を奉げるために来た」
マルコによる福音書 10:45

★ねらい

イエスさまに従うお弟子さんたちは、救いのためにエルサレムに向かわれるイエスさまが、カッコのよい栄光に輝く王様のようなものと考えていました。しかし、ご自分の命を奉げるために十字架に架かれることを知らされましたが、弟子たちはまだぴんと来ていなかったようです。そして人の子イエスが死への苦しみや恐れを持つ私たち人間のために仕える立場（あがないの十字架）であることを語られました。

神さまの人間救済は、人間が考える思考とは全く逆のお考えでなされることを伝えたい。

★説教作成のヒント

- ①前半部段落において「三度目の予告」であり、「人の子は三日の後に復活する。」という結びをクローズアップさせておくこと。
- ②この死と復活の予告と、弟子たちの理解の喰い違いを明確にする。
- ③ヤコブ、ヨハネと他の弟子たちの争い（腹を立て始めた）する態度にスポットを当てる。
- ④42～44節は“教訓”として挙げるけれども、45節にまさに神さまの御旨に結論を出す。

★豆知識

「異邦人に引き渡す」 → 当時、ユダヤ人たちには処刑の権限がなく、ローマ総督にだけ処刑の権限があったことから、異邦人に引き渡すという言葉を使用された。

「ゼベダイの子、ヤコブとヨハネ」

→ マルコ1章19節で召命を受ける兄弟。「ゼベダイ」とはヘブライ語で「私の贈り物」という意味があり、裕福な家庭であったようである。また、ヨハネ福音書18章15節から、大祭司と知り合いの関係であることが分る。したがってイエスさまがひょっとして、栄光の座に着くことを別の意味で捉えていたかも知れない。

「身代金」 → 囚われ人の命を買い取ること。あるいは買い戻す賠償金のこと。

★説教

イエスさまがお弟子さんたちを連れてエルサレムに行く途中も、道々いろいろなお話をされました。それらの教えやたとえ話をされる中で、三度にわたってご自分が、エルサレムに行く目的について話されましたが、それは実に恐ろしいあまり良い話ではありませんでした。というのは、ご自身が捉えられて、死刑を宣告され、十字架に架けられ殺される、という内容だったからです。しかし、最後の言葉に注目してください。それは「そして、人の子は三日後に復活する。」という言葉です。「復活する」とは、死んだものが生き返るという意味でもありますが、そんな不思議な話を三度も聞かされているお弟子さんたちです。私たちもそんなことは頭で理解できても、心から本当

に信じる事が出来ないですよね。だが、イエスさまにはそれが実現したのです。

これは後の出来事でしたので、それが起こる前にお弟子さんたちにとっては、どのように理解してよいのか分かりませんでした。先ほどのイエスさまが言われた前半の言葉と、最後の「復活する。」という言葉は両極端ですね。お弟子さんたちにとってイエスさまと一緒に旅をしてきた中で、信じられない不思議な奇跡や行いを見てきただけに、イエスさまなら何でも出来る超スーパーマンだから、まさか捕まえられて殺されるなんて考えてもいませんでした。だから彼らにとって前半の言葉が全く理解できないのも無理だったのです。しかし、最後の復活するという言葉がなんとなく彼らには「やはり、イエスさまだ！」と理解できるはずが無いのに納得したような感じがしたのでしょう。

全く矛盾した、無理解と納得した積もりとが交錯したお弟子さんたちで、少し混乱していたようです。それが後半の内容に現れています。後半部では、この話を聞いた12人のお弟子さんたちの中で、ヤコブさんとヨハネさんの二人はイエスさまに特別な扱いをお願いしました。というのは、イエスさまがエルサレムに入ってからスーパーマンのような活躍をしてユダヤ人たちを救い出すものと思っていたようでした。それは「栄光をお受けになるとき」という言葉がそうです。

したがってイエスさまが先に言われた「十字架にかけられて殺される」という言葉を見逃したようなお願いをしたのです。イエスさまは父なる神さまの命じられた、わたしたち罪人のために身代わりとなって十字架に架かれたことを忘れてはなりません。確かにイエスさまはかっこの良いスーパーマンのような奇跡をなさいましたが、それよりも大切な神さまのお約束を実行しなければならぬのです。それが「十字架」なのです。私たちの罪のために身代わりとなって罰をまず受けられ、それから三日後に復活という素晴らしいスーパーマンのようなイエスさまと出会うのです。この順序を抜きにしてイエスさまをみると、イエスさまの後半の教えの言葉を聞かなかったこととなります。ヤコブさんとヨハネさんの二人はこのように、十字架の出来事抜きのイエスさましか見ていませんでした。だから、他のお弟子さんたちがいるのに、「厚かましいお願い」をしてしまいました。これには他のお弟子さんたちが怒るのは当然です。

そこでイエスさまは、次のように言われました。「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、全ての人の僕になりなさい。」と。

そして、イエスさまご自身が神さまなのに、僕である私たち人間が犯した罪を帳消し（赦される）にされるために、僕のように十字架という重荷を負ってくださったことを覚えましょう。

このイエスさまの聖句のとおり、そのイエスさまの十字架の死を通してのみ、次に起こる復活という新しい永遠の命を得ることが出来るのです。

なんと素晴らしい神さまではありませんか。

★分級への展開

さんびしよう

*讃美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

61番

改訂版130番

やってみよ

人は一番になるのが大好きです。どんな一番になりたいですか？5cm各の折り紙に書いてみましょう（幾つでも良い）。そして、それを発表しましょう。

イエス様が一番になることがだめなこととおっしゃいません、しかし、えぼったり、弱い人をいじめたり、人にしてもらいたいとばかり思っている人は一番にはなれないとおっしゃいます。

もし、折り紙に書いたとおり、みなさんが一番になったとき、みなさんが他の人をいじめたり、えぼったりしないように、その折り紙を先週作った十字架にくっつけましょう。

- ・折り紙を2回ほど折って小さくし、紐で十字架に縛り付ける。

はなそう

いちばん上になりたい人が、すべての人の僕になることは、たやすいことだと思いますか？
どんなところが難しいでしょうか？

「仕える」というのは、どういうふうにすることだと思いますか？

イエスさまが多くの人々の身代金として自分の命を献げるというのは、どういうことでしょうか？

★今週の聖句

「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる」

ヨハネによる福音書 2:19

★ねらい

私たちの神さまは、私たちのいるところに何時でも、何処でもご一緒におられる生きた神さまであることを伝え、神殿とは神さまを礼拝し、祈りの場であることを知らせる。

神殿という建物そのものを礼拝対象としてはならず、また、神さまに供品物を行うことは偶像礼拝を犯す危険性があることに注意を促す。また、それは神さまが“あがない”（あるいは献げ物の犠牲動物）を求めているかのように理解されてはならないし、更に、献げ物の動物を購入する兌換紙幣（お札や貨幣など）の交換において手数料稼ぎの商売に熱中する習慣があり、イエスが怒られた意図を理解する。更に、イエス自身がその“あがないの小羊”として十字架に架かられたことを強調したい。

★説教作成のヒント

- ① 神殿とは何をする場所かを明確にしておくこと。
- ② なぜ、イエスが「わたしの父の家を商売の家としてはならない。」と言われた背景の説明をすること。
- ③ そして、21～22節が全てであることで締めくくる。イエスによる旧約から新約への移行。

★豆知識

「過越祭」→ ユダヤ人にとって最も重要な祭りである。先祖たちがモーセによってエジプトの奴隷から解放されたことを記念する祭りで、各地から多くの人々が集まった。

「神殿の境内」→ 神さまを礼拝する建物を含む敷地全体を言い、またその神殿で礼拝する前の心の準備と身支度をする空間を言い、また互いの情報交換の場でもあった。

「両替人・商売人」

- 当時の習慣として、律法の規定により神殿に入るには奉げ物（生け贄）が必要でした。外国や遠方から来た人たちには、生きた動物を連れて来るのが大変なために出発地現地で動物購入証明書を持参して、これを神殿境内で動物と交換する制度があった。このときの動物購入証明書などを兌換紙幣と言います。現代の紙幣と言われるのはここから来ています。また直接、動物を購入することもあり、境内ではこれらの動物を売る人たちが賑わっていた。また、外国や遠方から来た人たちのために、外国の通貨とユダヤの通貨を両替したりしていた。当然貨幣両替や動物売買において手数料稼ぎが行われていた。

★説教

今日のお話に入る前に、先週のお話でイエスさまが、「わたしは、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」と言われた言葉を思い出して下さい。この中で、ご自分の命

を献げると言われた「献げる」という言葉が今日お話の前半部と関係してきます。

さて、イエスさまがエルサレムの町に入るやいなや直ぐに神殿に行かれ、そして神殿の境内にいた両替人や商売人などを追い出されてしまいました。聖書を読むとイエスさまにしては珍しく怒っておられる様子が分ります。それは何故でしょうか？

当時の習慣では、律法という規則で神殿に行くときには「献げ物」を携えてゆく決まりがありました。たとえば、イエスさまがお生まれになってすぐに、父ヨセフさんと母マリヤさんがイエスさまを神さまに献げるためにエルサレムの神殿に行ったという記事がルカ福音書の2章22節以下にあります。まさか生まれたばかりのイエスさまを神さまに献げるなんてことはありませんよね。ここでは、主の律法に言われている通りに、イエスさまの代わりに山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽を生け贄として献げるためであった、とあります。

このように神殿に行くときには、「献げ物」を携えて行かねばなりません。献げ物には鳩以外に牛や羊などの動物などがありました。エルサレムに近くに居る人たちはいいでしょうが、遠い所に住んでいる人や外国に住んでいるユダヤ人たちにとっては生け贄用の動物を連れて神殿に来ることは大変です。そのために神殿の境内で鳩や牛や羊を売っている商売人の人たちが沢山いました。また、外国から来た人たちは外国のお金をユダヤのお金に代えて、生け贄の動物を買わなければなりません。この商売人や両替人たちは時には法外な手数料を取ってボロ儲けをしたりしていました。イエスさまはこのことに怒りを覚えられてこの人たちを神殿の境内から追い出されようとしたのです。

さて、イエスさまはこの商売人や両替人たちがボロ儲けしていることをダメだと言われただけでしょか？ 当時のユダヤ人たちにとって、母マリヤさんたちが律法に忠実に従ってイエスさまの代わりに山鳩を買われて献げ物とされたように、最も大切な習慣だったのです。それをイエスさまが神殿のことを「わたしの父の家」と呼ばれ、更にそれを「商売の家にした」と批難されたのです。また、その光景を見てお弟子さんたちが、「あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす」と書いてあるのを思い出していることから、神さまに対して良い献げ物をという熱心な思いが商売人や両替人の制度を生み出し、献げ物に重きを置き、肝心の神さまを真に礼拝し祈ることが二の次になってしまったことを怒られたのです。この箇所は他の三つの福音書にもあり、イエスさまの「宮清め」とか「神殿清め」とか言われ重要な内容なのです。神殿とは何をする所なのでしょうか？と、問われていることでもあります。また、最も大切なことは、ヨハネ福音書の4章21節以下で「あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。」と言われていることから、何も神さまは神殿だけで礼拝されるものでなく、わたしたちのいる所で礼拝し、祈ることが出来ることを明らかにされました。また、いろいろな動物を生け贄として献げる必要の無いことも含んで、自らが生け贄の小羊となって十字架に架かることから、神殿の境内にいた商売人や両替人たちが不要であることをはっきり示すために追い出されたのです。

そして生きた神としてイエスさまご自身を礼拝し、祈る対象であることを宣言されたのが、次の言葉です。「この神殿を壊してみよ。三日で建て直して見せる。」と、十字架の死で古い神殿を壊し、三日後の死からの復活によって、新しく自らが礼拝される神殿だと言われたのが今日の暗唱聖句なのです。

2009年3月15日 四旬節第3主日その2

★分級への展開

さんびしよう

*讃美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

93番

改訂版105番

やってみよ

心をこめた献げものって何でしょう？

もし、今みなさんの前にイエス様がおられたら、みなさんはどんな献げものをしますか？

5cm 各の折り紙に書いてみましょう。書いたものを発表してもよいでしょう。

その折り紙を先週と同じ要領で十字架に縛り付けましょう。

はなそう

イエスさまは、それまであたりまえのように行われていた神殿での商売を、こわしました。

「わたしの父の家を商売の家としてはならない。」とは、どういう意味だと思えますか？

そこにいた人々は、イエスさまのことをどう思ったのでしょうか？

★今週の聖句

「その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」

ヨハネによる福音書 3:16

★ねらい

四旬節（主の受難節）においてイエスさまがなぜ、十字架に架からねばならないのかという理由が本日の主題暗唱聖句です。前半部の14節は旧約聖書の民数記21章4節以下からの引用であり、モーセが荒れ野で蛇を上げたという意味と、イエスさまが十字架に上げられたこととの結びつけの紹介をする。

「そのことを信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。」というもう一つの、十字架の死と復活の出来事を明らかにしてゆく。

★説教作成のヒント

- ①まず最初に、旧約聖書民数記21章4節以下を紹介する。
- ②そことと、イエスさまが十字架に上げられたということに結びつける。
- ③ただし、そこで「青銅の蛇」ではなく十字架上のイエス、「復活されたイエス」を指摘する。
- ④「人の子」及び「独り子」とは誰のことを指すか、また「独り子」は無限の愛の対象者であることを述べ、その方の命を罪人の私たち人間に差し出された神さまの愛を伝える。

★豆知識

「青銅の蛇」

→ 民数記21章4節において「炎の蛇」が登場するが、「炎」とはエネルギーであり、物を動かす源である。「蛇」という生き物は創世記3章1節において神が創造された中で最も賢い生き物とされており、人を噛むことによって死をもたらす。モーセは神から命じられて「青銅の蛇」を造り旗竿の先に掲げた。人間を噛んで死に至らせる生き物が、逆に旗竿に掲げられてそれを仰ぎ見ることによって今度は噛まれた人間が命を得るということは、何を意味しているか考えてみよう。

（ヒント） 「知識に溺れるものは知識に死に、知識を仰ぎ見れば知識に生きる。」

「イエスの呼称について」 → 14節「人の子」→「神の独り子」→「御子」→「光」

「この世」 → この世が悪いのではなく、悪が支配するこの世が裁かれる。それが救いに至る。

★説教

今日与えられた聖書の中のイエスさまのお話は少し難しいかも知れませんが、この世でいろいろなことで悩んだり、苦しんだりしている人たちを救うために、イエスさまが十字架に架からねばならないことをお話しされました。この中で聖書の前半部の14節で「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。」とされているところがあります。それは旧約聖書の民数記21章4節以下にその記事があり、ご自分がその掲げられている青銅の蛇だと言われたのです。（ここで旧約聖書

を読む) ここからも分るようにせつかく神さまによって苦しいエジプトの奴隷生活から解放されたにも関わらず、神さまとモーセにさからって文句を言ってしまいました。そのために、「炎の蛇」という不思議な蛇によって噛み殺されてしまいました。が、しかし、その神さまに逆らった罪を後悔し、反省して神さまに謝まり、二度と蛇に噛まれて死ぬことのないように願った結果、神さまがモーセに命じて旗竿に掲げた「青銅の蛇」を仰ぎ見るならば命を救われるという事件を、イエスさまは、ご自分がその蛇と同じようにこれから十字架に上げられのだと言われました。ちなみに、旧約聖書では「蛇」という生き物は神さまがお造りになられた動物で「最も賢い生き物」とされていますが、人間を騙して、神さまの意思から離れて独り歩きするきっかけの原罪になったことを思い起こしてください。したがって「蛇」という動物は「賢い」生き物であることから、人間が求めて止まないあらゆる「知識」とか「知恵」というものと同じ意味に使われ、神さまの教えや警告など無視して、神さまから引き離してしまう力があります。

人間はこの世に生きていますが、平和と安心を望んでいるにもかかわらず、競争をしたり、人と人の争いや戦争をしたりしています。それはなぜか？確かな真理であり光である神さまというお方を信じることなく生きています。それは自分の考え方や行いが絶対正しく間違いがないという「知恵や知識」に溺れて、神さまを信じないで自分を信じている結果が、人と人の争いを生み出しているからです。そしてこの世がいろいろな不信感や悩みとか苦しみなどの悪に支配され暗闇となり、滅びに至ろうとしています。しかし、万物を創造された神さまは、ご自分が造られたこの世が勝手に人間の罪によって滅びることを望んでおられません。神さまがお造りになったこの世が神さまの御旨を離れて滅びようとしていることを望んではおられないのです。

ところが人間はその神さまの心を知らないで、あのイスラエルの人々のように、神さまに不満をぶっつけたりして反抗したりします。また、神さまの言われることを無視して、生きるためにいろいろなことを体験したり、学んだりして「知識」や「知恵」だけに頼ろうとしました。それが結果として「知識という蛇」にかみ殺されることになり、滅び行くものになってしまったのです。

しかし、その生きるための「知識」を、神さまの言葉として正しく聞くならば、また十字架の出来事から十字架にかかれたイエスさまを仰ぎ見るならば、永遠の命を得ることをイエスさま旧約聖書の「青銅の蛇」から引用されて示されたのです。

神さまは、蛇ならぬご自分の独り子を、十字架に掲げることをイエスさまに命じられたのです。なんとむごいことではないでしょうか？それは何度も言われているように、罪を犯した私たちが唯一、イエスさまの身代わりとなって死んでくださり、その十字架に掲げられたイエスさまを仰ぎ見ることによって、罪を赦された永遠の命を得ることが出来るという素晴らしいものに変わってゆくのでしょうか？

その理由は暗唱聖句の「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」からです。なんと凄い、神さまの愛ではないでしょうか。十字架抜きでは語れない神さまの愛です。

★分級への展開

さんびしよう

*讚美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

5番

改訂版49番

やってみよ

みなさんは、神さまに文句をいったことがありますか？

神さまは私達を愛してくださっていると聖書には書いてありますが、どんな時にそれを感じますか？また、どんな時に「神さまは私なんか愛してない！」と思いますか？神様に愛されていないと思うときを考えてみましょう。また、いままでそういうふうにしたことがあったら、それを5cm各の折り紙に書いてみましょう。

神さまは私なんか愛していない！そんなふうと思うときでも、神様は確かにみなさんを愛しています。そのことを忘れないために、この紙を先週の要領で十字架に縛り付けましょう。

はなそう

神さまは、そのひとり子、イエスさまをわたしたちに与えてくださいました。それは、何のためだったのでしょうか？

あなたは、“神さまが自分のことを愛してくださっている”、ということについて、考えたことがありますか？そのことについて、どう思いますか？素直に感じたことを、みんなで話してみましょう。

★今週の聖句

「わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなくて、
わたしを遣わされた方を信じるのである。」

ヨハネによる福音書 12:44

★ねらい

四旬節も最後の週に入り、次週はいよいよ「聖週間」に入ります。人類の救いのために罪の無い方が、罪人のために十字架という刑罰を身代わりとなって受けられるのです。愛する好きな人のためなら、だれでも身代わりが出来るでしょうが、憎むべき罪人のために死ぬということはほとんど無いでしょう。よってその出来事をなかなか信じられないのは、何もイスラエルの人々だけではありません。私たちもそうでしょう。しかし、このイエスさまの十字架を通してのみ救われるという神さまの御旨は、生前のイエスさまが予告されただけではなく、旧約聖書時代から長い間、救い主到来の預言がなされていたことを強調する。そして、それを聖書（旧約聖書）でよく精通（承知）しているはずの多くのユダヤ人（ファリサイ派）たちには理解できなかったことを示し、私たちも人間としてのイエスさまばかりを見てしまい、そのイエスを遣わされた父なる神さまの愛と憐れみを忘れてはならないことを想起させたい。

★説教作成のヒント

- ①冒頭の36節後半部の「これらのこと」についてとはどのようなことかを説明する。
- ②37節の「多くのしるし」とは多くの奇跡を指すが、それを見ながら、神さまの業であると信じていることが出来ない人たちについて、イザヤ(引用文)を通して預言されていることに注目したい。
- ③「神からの誉れよりも、人間からの誉れを好んだ」という人たちの存在。
- ④イエスは、普段はおそらく穏やかな口調で語られていたと思われるが、44節では「叫んで、こう言われた」とあります。何故なのか、展開させてもよい。イエスの心境を筆者は強調しているでしょう。
- ⑤イエスさまが言われる信仰とは、神さまと神さまの何を信じるかということであり、神さまの業がただただ人間救済であり、そのことのためのイエスさまの生涯の先にあるのが、十字架の死と復活であることを伝える。

★豆知識

「多くのしるし」 → ギリシア語で「セメイオン」（しるし）が使われており、イエスの数々の奇跡をここでは指している。

引用 → 39節→イザヤ 53:1 ここでは、想像がつかないほどの苦難の僕のありさまで「救い主」の登場を強調した言葉である。40節→イザヤ 6:10 イザヤが召命されたときの主の言葉である。

★説教

悪い人に殺されることはあっても、悪い人のために殺されるということは、普通考えられません。しかし、私たちのイエスさまは罪が無い人なのに、罪ある私たちのために十字架にお架かりになると

言われたのです。当時のイスラエルはローマという大帝国に支配され、自由のない、また苦しく貧しい生活をしていました。イスラエルの多くの方はきっと神さまがいつかこの苦しい生活から解放してくださると熱心に祈り、イスラエルのために解放者を送ってくださると信じていました。その苦しみからの解放者を、「救い主」＝メシアと呼んでいました。

そこへ、神さまが約束どおりに救い主としてイエスさまをこの世に遣わしてくださったのです。イエスさまは立派な教えやたとえ話を多くの人々に話されました。また、不思議な奇跡を起こされたので、民衆はこの方こそ神さまが約束されていた「救い主」かも知れないとイエスやお弟子さんたちの後に従ってエルサレムにまでやってきました。

貧しく苦しみにある人たちはイエス様に病気や体の不自由を癒してもらったりしたので、イエスさまを「神の子」と純粋に信じていましたが、しかし、エルサレムの人たちや、祭司や律法学者たちはそのイエスさまを見て、とてもイエスさまが、神さまから遣わされた威風堂々とした力強い「救い主」とは信じる事ができませんでした。また、イエスさまが神さまのことを「わたしの父」と呼んだために、かえって神さまの名をかたる罪人だと批判し、イエスさまがなされてきた「奇跡」を見ていながら、イエスさまを神さまの子と認める事が出来ませんでした。

また、イエスさまご自身が、ご自分が多くの人から裏切られ、そして裁かれて十字架で殺されるということを言われたのです。これだけだと問題はなかったのですが、十字架で死んだ後、三日後によみがえるといわれたものですから、祭司や律法学者たちはそんな馬鹿なこととして全く相手にしませんでした。しかし、自分は神さまの子だと言ったことだけは、最も大切な掟である「律法」の基礎あのモーセによって与えられた「十戒」の第一の戒めである、「私以外のものを神とするな」という教えに反するとして、イエスさまを十字架に架けてしまいました。

多くのイスラエルの人たちの中で、お弟子さんたち以外にも、イエス様さまの不思議な奇跡や、立派な教えを聞いてイエスさまがひょっとして「救い主」かも知れないと思った人たちもたくさんいました。しかし、41節以下にあるように、イエスさまの教えや奇跡などを見てイエスさまを信じた議員たちでも、実際にイエスさまが十字架で殺され、三日後に復活されるまでは信じていることを公にする人はいませんでした。それは、イザヤ自身が既に神さまから伝えられていました。それが、39節や、40節の引用文です。私たちがイエスさまの教えや奇跡を見たから信じたのでしょうか。また、見たから信じたのであれば確かですが、見てもいないことを信じるということは大変な凄いことです。

また、イエスさまを信じることも大切ですが、そのイエスさまをこの世の救いのために、父なる神さまが命じられたとおりに、私たちの罪のための身代わりとなって十字架にお架かりになるイエスさまを遣わされたお方のことを忘れてはなりません。

イエスさまは声を大にして「私を信じる者は、私を信じるのではなくて、私を遣わされた方を信じるのである。」と言われた言葉が今日の暗唱聖句です。

最後に最も大切なこととして47節の「わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである。」とはっきりと宣言されておられることに目を向けて下さい。

イエス様の生涯の最後に十字架という大変な苦難があるにも関わらず、イエスさまの生涯が死でもって終わったのではなく、その先にある「復活」という栄光につながっていることに、死を恐れている私たちもそのイエスさまの復活に与れるという素晴らしいことから、何物も恐れることのない生き方が出来るのです。四旬節とは、私たちの救いのためにイエスさまが苦しまれたことを通して永遠の命に与れることを覚えて過ごす期間です。

★分級への展開

さんびしよ

*讃美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

129番

改訂版106番

やってみよ

今日の聖書には旧約聖書の言葉が二箇所出てきました。

旧約聖書のどこに書いてあるか探して見ましょう。

私達が見なくても信じることができるように、人間からの誉れではなく神からの誉れを喜ぶように、ヨハネによる福音書 3:40 の言葉に続けて、神さまへのお祈りを、5cm 各の折り紙に書いて、例の十字架にいつものように縛りつけましょう。（ヨハネ 3:40 とそれぞれのお祈りを折り紙に書く）

はなそう

ある人々は、神さまを信じていても、イエスさまが神さまのもとから来られたということを信じませんでした。それは、どうしてだと思いますか？

見たことや、聞いたことがないことや、起こっていないことを信じることは、難しいですか？あなたは、どうしてそう思いますか？